

森嶋通夫著「なぜ日本は没落するか」岩波現代文庫 岩波書店 2010年7月16日刊を読む

## 東北アジア共同体案

1. —今、日本は破綻した金融システムの再建に血眼。それで不況は克服されますか？

金融破綻はいつかは収まる。それがたとえ解決しても、このままでは日本経済、なかでも雇用はよくなり、失業はますます増え、社会不安にまで広がるだろう。そんなに深刻な事態にあると言える。1929年から31年まで続いた金融恐慌、いわゆる昭和恐慌の時は満州(中国東北地方)や中国などに侵略して、雇用を創造することができた。今度はそういうことはできない。

2. —今、考えねばならないことは雇用をいかに創造するか、ですね？

そうだ。それにはイノベーション(新機軸、すなわち全く新しい構想)が必要。かつて松下幸之助や盛田昭夫といったイノベーターが私企業を起こし、今日の松下電器やソニーにしたが、今、求められているのは政治的イノベーションだ。日本の高度成長(1950 - 70年)は朝鮮戦争とベトナム戦争の特需のおかげの部分が多い。経済は帆船に小さなエンジンがついているようなもので、大きな風が吹くとスピードが上がる。加速の大部分は風の力だ。政治的イノベーションこそ「大きな風」だ。それを起こさないと、日本丸はほとんど動かない。

英国再建でサッチャー元首相は福祉を縮小、ブレア首相は新しい構想で福祉の合理化を試みている。彼らは政治的イノベーターだ。だが、日本にはそのような政治家はいない。

3. —先生はかつて「東北アジア共同体」構想を提唱されたが、それですか？

今のように発達した交通(運輸と通信)と生産力の下では東北アジア各国の領土では狭すぎる。私の「東北アジア共同体」には日本、中国、朝鮮半島、台湾、琉球の東北アジア諸国が含まれるが、ベトナム以南の東南アジアは含まれていない。この東北アジアは歴史的文化的に近く、人種的にも近い隣国だから共同作業が出来る。それは、「建設共同体」であって、はじめはEU(欧州連合)のような市場共同体ではない。まず建設することだ。次に市場開放という手順である。EUでも仏独の石炭・鉄鋼共同体から始まった経緯がある。まず資源開発をし、それをコントロールして有効利用をし、産業を建設するのだ。

4. —それはどんなものですか？

私の提唱する「東北アジア共同体」は幾つかのブロックからなるもので、中国を例えば6ブロック、朝鮮半島と日本を各2ブロックにそれぞれ分け、台湾を1ブロックとし、沖縄(琉球)を独立させてそこに首都を置く。共同体の首都はEUのベルギーのブリュッセルのように小さい国に置くのがよい。中国を6ブロックに分けるのは中国以外が6つとなるから、6対6にするため、台湾を中国に含めれば7対5となり、中国にやや有利となる。建設場所が主に中国となるのだからそれぐらいが均衡値だ。共同体政府の下で建設プログラムを立て、日本は資本と技術を提供すれば、仕

事は大量に創造され、雇用はどんどん増える。もちろん朝鮮半島にも建設候補地はあるだろう。多くの方は北朝鮮は加入しないというかも知れないが、中国と韓国と日本が説得すれば、早晚必ず加入する。

やるというアナウンス効果だけでも世の中は明るくなり、景気は上向く。小渕内閣の二万円のクーポン券(地域振興券)は幼児のお年玉のようなもので、考え方も貧弱、悲しくなるね。

5. —日本ではもう需要がないというわけですか？

クルマが開通式以外に通ったことがない観光道路を建設したり、四国に橋を三本も架け、さらにもう二本、と無理矢理に建設しようとしても投資効果があるだろうか。遷都も東京が世界的に見て、最も効率的な首都なのだから必要はない。それより中国の奥地には眠っている資源がまだある。それらの資源を開発し、鉄道を建設、沿岸の都市の港湾を整備、そこから輸送すれば、投資効果は絶大だ。わが国の鉄道のソフトウェアシステムは世界一だし、輸出用の船はわが国や韓国で造ればよい。新幹線の建設ではフランスの TGV がわが国より時速 10 キロメートル速いからといっても日本の鉄道運輸のソフトウェアがよいから、ハードとソフトの全体では断然すぐれている。

戦前にも、高田保馬の「東亜民族論」などの共同体発想があった。残念なことに、そのあと東条英機が試みた大東亜共栄圏の建設は侵略的であったのだが——。

6. —戦後、日本人は侵略戦争にこりこりするあまり、それまであった共同体的発想までも捨ててしまった？

アジアへの侵略は弁解の余地がない。謝るべきです。それも心から謝れば、将来に向かって話し合えるようになる。

明治維新も若い志士たちがやった。幕末、ロンドンには国禁を侵して各藩から留学にやって来ており、お互いにヨーロッパの現状を見てびっくり、これではいかんと帰国、彼らが力を合わせてやったのが維新だ。彼らのスローガンの公武合体や尊皇攘夷は、三百余藩に分かれてはいかん、「日本よ、団結せよ」だったのだ。また当時、ドイツは文化的には程度が高かったものの、国は千にも分かれ、ニッチもサッチもいかず、フランスやイギリスには圧迫され通しだった。そこで、ドイツの経済学者フリードリッヒ・リストが言ったのが「ドイツよ 団結せよ」である。今こそ、アジアは団結しなければならない。

P151 ~ 157

[コメント]

国内需要の無くなった日本の雇用をどう創出するかとの観点に立ったエコノミストの森嶋先生の東北アジア共同体論。極めてユニークだが、現実的にはこのくらいまで考えなければ日本経済は立ち行かないのかも知れない。すべての論説に考えるヒントがちりばめられている日本人必読の書。

- 2010年7月6日 林明夫記 -